

研究ノート

『バーク読本』(昭和堂、2017年8月)の編集から
見えてきたこと*

中澤信彦**

要 旨

このたび『バーク読本—〈保守主義の父〉再考のために』と題する書籍を刊行する機会に恵まれた。同書は、科研費にもとづく共同研究の研究成果として、専門分野を異にする10名のバーク研究者が執筆したものである。この小論では、筆者が編者として編集作業の過程で振り返らざるをえなかった自分自身の研究史に触れながら(Ⅰ)、同書がバーク研究・保守主義研究のいかなる新地平を切り拓こうとしたのかを確認し(Ⅱ)、同書の成果がこれからのマルサス研究にもたらす豊かな可能性の一端を瞥見したい(Ⅲ)。

キーワード：バーク；マルサス；保守主義

経済学文献季報分類番号：01-21；02-11；03-40；03-43

I

2017年8月、中澤信彦・桑島秀樹編『バーク読本—〈保守主義の父〉再考のために』(昭和堂)がついに刊行された。専門分野を異にする10名のバーク研究者によって執筆された同書¹⁾は、

* 第31回経済学方法論フォーラム(2017年8月30日、於小樽商科大学)において、「『バーク読本』(昭和堂、2017年7月)の編集から見えてきたこと—経済学方法論史との関連で」との表題で、本稿の下報告を行った。

** 関西大学経済学部 Email: nakazawa@kansai-u.ac.jp

1) 同書の執筆者は、中澤信彦(関西大学；編者、序章「〈保守主義の父〉再考のために—まえがきに代えて」、あとがき；経済思想史・経済学方法論史専攻)、桑島秀樹(広島大学；編者、第4章「崇高・趣味・想像力」、第5章「アイリッシュ・コネクション」、あとがき；美学・感性哲学専攻)、犬塚元(法政大学；第1章「受容史・解釈史のなかのバーク」；政治学史・政治思想史専攻)、真嶋正己(広島文化学園大学；第2章「アメリカ革命とフランス革命」、補論「アイルランド貿易制限緩和問題」；政治学・政治思想史専攻)、苅谷千尋(立命館大学；第3章「インド論」；政治思想史専攻)、佐藤空(東洋大学；第6章「歴史叙述」、第7章「経済思想(1)—制度と秩序の政治経済学」；社会思想史・経済思想史専攻)、立川潔(成城大学；第8章「経済思想(2)—財産の原理と公信用」；経済学史専攻)、高橋和則(中央大学他・非；第9章「自然法・自然権・社会契約」；西洋政治思想史・政治理論専攻)、土井美徳(創価大学；第10章「国家・古来の国制・文明社会」；西洋政治史・政治思想史専攻)、角田俊男(武蔵大学；第11章「戦争・帝国・国際関係」；思想史・文化史専攻)、以上10名である。

共編著の形をとっているが、筆者が研究代表者として深く関与した共同研究²⁾の産物であり、筆者自身にとって2009年2月に刊行した単著『イギリス保守主義の政治経済学—バークとマルサス』（ミネルヴァ書房）〔=中澤2009〕に続く二冊目の主著と言っても過言ではない。

筆者は大学院生時代に幸運にもE・バークとT・R・マルサスの思想の比較研究という非常に魅力的なテーマに出会い、それ以降の約15年間——筆者の20代後半と30代——の研究成果を中澤（2009）としてまとめた。それに対して『バーク読本』は、40代を終えつつある筆者が現時点で抱えている最新のバーク像を、信頼できる中堅・若手のバーク研究者の協力を得て、編者の立場からまとめたものである。しかしながら、『バーク読本』におけるバーク像は中澤（2009）のバーク像の連続的な発展の延長線上に必ずしも描き出されておらず、むしろ両者の間には断絶と言ってよい側面すら見受けられる。もっと強い表現を用いるならば、『バーク読本』は中澤（2009）が達成しようとしていたことを根底から転覆させかねない「自己破壊」の書としての一面も有している。なぜそのような大転換が生じたのか。その最たる理由は、筆者がバークとマルサスの思想の比較研究を遂行するにあたって長らく前提としていた議論の枠組み——水田洋のスキーム（後述）——からの完全な離反の必要性を、『バーク読本』の編集作業の過程でようやく認識するにいたったからである。

バークとマルサスの思想の比較研究というテーマそれ自体は、それに本格的に取り組んだ研究者が管見のかぎり筆者以前に事実上一人もいなかったように推測されるものの、少なくともわが国の学界において決して新奇に映る研究テーマではなかった。そのような知的状況の醸成において、中央公論社『世界の名著』シリーズの水田洋編『バーク マルサス』の巻が果たした役割は相当に大きかったように思われる。

フランス革命に対する批判的態度、過去の遺産の重要性の強調、階級（貴族・地主）的立場にもとづくブルジョワ社会への批判などを共通項として、「イギリス保守主義の〔一番打者バークに対して〕二番打者マルサス」（水田1969, 26）を対置させる水田のスキーム——同様のスキームはおぼろげな形で大河内一男（1950, 127-138）が水田に先んじて描き出しているけれども——は、修士論文で初期バークの文明社会論をテーマとして選択しながらも、すぐれて政治家であって経済思想家とは言い難いバークを単独で論じるだけでは経済思想史研究としての広がり欠けるように見え、近い将来における研究の行き詰まりを不安視していた20代の筆者に、マルサスという格好の比較対象を教えてくれた。同時に、水田のバーク経済思想に対する低い評価³⁾をいかにして覆すかが、経済思想史研究者としての筆者の長

2) 日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会科学者としてのE・バーク：経済思想と歴史叙述の分析を基軸とした総合的研究」（研究代表者：中澤信彦；課題番号：15H03332；2015-17年度）。

なお、本稿もまたこの補助金にもとづく研究成果の一部である。

3) 「経済的には、バークが地主の立場から穀物輸出の奨励を主張した（のちのマルサスに依る）のに

期的な課題として眼前に立ち現れたのだ。

筆者が水田のスキームとどのように対峙してきたかについては、すでに中澤(2016)で詳述したとおりである。要するに、保守主義を没落しつつある貴族・地主階級のイデオロギーと見なして、その中核概念(保守すべき価値)として「過去の遺産」を強調する水田の解釈は、あまりにもマルクス主義に偏重した思想史理解であるように思われたし、明確に区別すべき保守主義とロマン主義の概念上の差異を曖昧化しかねない理解でもあるように思われたため⁴⁾、筆者はそれをポジティブに受け入れることができなかった⁵⁾。したがって、20代後半・30代の筆者の研究の基本的スタンスは、パークとマルサスに共通する思考としての経済学的思考を抽出し、それを「イギリス保守主義の政治経済学」と名付け、「過去の遺産」に重きを置かない非ロマン主義的な保守主義の再定義(新たな定義)に活かそう、というものであった⁶⁾。ただし、中澤(2016, 50-51)にも書いたように、ごく最近まで水田のスキームの

たいして、スミスは輸入の抑制にも輸出の奨励にも反対であった。パークが晩年に書いた『穀物不足にかんする思索と詳論』(1795年)をよんでも、経済思想におけるパークのたちおくれはあきらかである。スミスが、「パークは、経済問題について自分と正確におなじ考えをもつ、わたくしのしるかぎり唯一の人である」といったとつたえられているのは、このような点を考察すると、あまり信用できない」(水田 1969, 18)。

- 4) もっとも、水田自身は保守主義とロマン主義をまったく同一視しているわけではない。「パークは歴史主義およびロマン主義のなごれに属すると考えられているが、歴史主義のなかにある歴史的变化の意識、民衆=民族の意識も、ロマン主義のなかにある近代社会と自我の問題も、パークにはない」(水田 1969, 23)。
- 5) 筆者はかつて「無能力ではないが不完全性を免れない人間……が致命的な誤りを犯さないためには、伝統の知恵を借りながら漸進的な改革を行うより以外に方法がない、というのが彼 [=パーク] の人間と社会の進歩に関する基本的見解である。／『省察』の主張の核心をなすのは「時効 (prescription)」の思想である」(中澤 2009, 18)と書いたが、これは当時の筆者が水田のスキームに対して抱いていた批判的視座が不十分であったことの証左であり、読者をミスリードするものでもあった(パークとスミスとの比較も同様に読者をミスリードするものであり、この点については中澤(2016, 44, 注18)を参照)。中澤(2016, 51)では、こうした反省を踏まえて、「パーク段階ではまだロマン主義的要素が比較的高い割合で混在していたイギリス保守主義——それゆえ「過去の遺産」への依存=時効論こそが保守主義の根本原理だと誤って理解されやすかった——は、マルサスの段階になってようやくロマン主義と訣別するにいたった」と書くことで、この論点をめぐる水田のスキームへの批判的視座をいっそう明確化するように努めた。
- 6) かつて筆者は保守主義を以下のように(再)定義した。「保守主義という言葉は読者の誤解を招きやすい言葉である。この言葉は、過去への郷愁、長年慣れ親しんできた事物への愛着、急激で極端な変化や未知なものを嫌う気質といった人間の普遍的な心的傾向を意味する場合もあれば、アメリカ合衆国共和党の信条および政策(あるいはイデオロギー)を意味する場合もあるが、本書が保守主義という言葉によって意味するところはそのいずれでもない。思想史において一般的に理解されているところの保守主義とは、急進的な変革に頑迷に情緒的に反対するのではなく、人間理性の限界性と人間社会の複雑性の認識に基づきながら、保守すべき価値を積極的かつ慎重に選択して現存社会秩序の枠内で漸進的な改革を達成しようとする、一個の近代思想である」(中澤 2009, 1)。この定義はかなり綿密に計算されたものであり、保守すべき価値としての「過去の遺産」を含まないことによって、水田のス

うちイギリス保守主義の一番打者バークに対する「二番打者マルサス」という規定⁷⁾だけは、そこに水田自身の意図をこえた巨大な価値——保守主義概念の豊饒化のための手がかり——が胚胎しているに違いないという直観を筆者が強く保持していたために、まったく手を付けなかった⁷⁾。バークとマルサスをともにイギリス保守主義の代表的思想家と見て、両者の思想史研究から保守主義の（再）定義、保守主義概念の豊饒化へと進むという、長期的な研究計画を変更するまでにはいたらなかった。

II

しかし、2014年3月に開始されたバークに関する共同研究（通称「バーク研究会」、2015年4月からは2018年3月までの3年間の予定で科研費が首尾よく獲得された）は、それまでの筆者の研究計画に抜本的な修正を迫る結果になった。

振り返ってみれば、少なくともここ数十年来、ごく最近にいたるまで、内外の学界において「バーク」と「保守主義」の結びつきが疑問視されることはほとんどなかったように思われる。〈保守主義の父〉としてのバークは、内外の学界の「常識」「通説」にはほかならなかった。例えば、目下最新の保守主義についての概説書として評価の高い宇野（2016）においても、「保守主義といえば、エドモンド・バーク（1729-97）以来の伝統をもつ政治的イデオロギーである」（9）、「保守主義の源流としてしばしば指摘されるのがエドモンド・バークである」（23）、「言葉として「保守主義」が生まれたのはバーク以降である」（50）といった「通説」が繰り返し記されている⁸⁾。筆者自身も、中澤（2009）の「あとがき」で、「通説では、バークの『フランス革命の省察』によってイギリス保守主義が成立した、と見なされているが、本書はこの通説に異議を唱えようとするわけではない」（247）と記し、自身の研究がこの「通説」を基本的に踏襲したものであることをわざわざ断っている。

キームへの側面からの批判にもなっている。その後、筆者は中澤（2010）において、中澤（2009）の議論をより精緻化・深化させて、保守主義の再定義を改めて提唱した。「保守主義の本質」は「保守すべき内容」ではなく「保守する方法・態度」——リアリズム（現実主義）や改革のスピード（漸進主義）——にある、と。

- 7) 中澤（2010）（2015a）（2015b）（2017a）（2017b）はいずれも、「イギリス保守主義の〔一番打者バークに対する〕二番打者マルサス」という規定を議論の前提としており、この規定の歴史妥当性を疑うまでにはいたっていない。
- 8) 宇野（2016）は「「保守主義」という言葉が使われるようになったのは、19世紀初頭のことである。逆にいえば、バークの時代にこの言葉は存在しない」（50）という留保を付すことも忘れていないが、犬塚（2017, 24）が指摘するように、19世紀初頭の時点においてもバークを保守主義の創設者と見なす言説はまったく一般的でない。後段で論じるように、保守主義という言葉それ自体の成立とその創設者としてのバークという見解の成立との間には一世紀ほどのタイムラグが存在している。

しかし、今回の共同研究によって明らかにされたのは、〈保守主義の父〉としてのバークという通説的イメージは20世紀初頭にイギリス保守党が党理念の再定式化という政治的意図のもとで作上げたものにすぎず、それ以前の時代においてバークを保守の側に引き寄せて解釈することはまったく一般的でなかった、という歴史的事実である(犬塚 2017, 26-28)。衰退過程にあった自由党はアイルランド自治法案(1886)への賛否をめぐって分裂し、その反対派(リベラル・ユニオニスト)は1912年に保守党に合流した。ここにいたって保守党は党の理念を再定式化する必要に迫られた。Cecil(1912)において、バークの(旧)ウィッグ思想はその再定式化のための知的資源として乗っ取られ、彼は保守主義の創設者として位置づけられた⁹⁾。セシルの言説の影響力は大きく、それ以降はバークの政治思想を保守主義と規定する言説が続々と再生産され、そうした規定が通説化されていった。また、20世紀においては、保守主義の多様性はバーク解釈の多様性と連動していた(犬塚 2017, 34)。〈保守主義の父〉たるバークの所属政党が、なぜ(保守党の前身である)トーリー党でなく(自由党の前身である)ウィッグ党であったのか、という聞き慣れた問いは、先の歴史的事実の見落としによって生みだされた問いである、と言ってもよい。

このように、こんにちわれわれが慣れ親しんでいる〈保守主義の父〉としてのバークのイメージは、歴史的に見れば「後知恵で作られた物語」(犬塚 2017, 24)にすぎない。たかだか100年ほど前にできあがったそのような思想史理解にわれわれが依然として強く支配されているという事実を眼前に突きつけられて、われわれは以下のような疑問を声高に発せざるをえなかった。すなわち、われわれは〈保守主義の父〉という言葉が想起させるイメージにぴったり当てはまらない(経済的・歴史的著作やインド問題をめぐる諸論考などの)バークの多彩な言論活動を、バーク思想にとって周辺的なもの・非本質的なものとして——意識的であれ無意識的であれ——排除・軽視してきたのではないか。そのことが、彼と実際に交流のあった同時代の偉大な知識人D・ヒュームやスミスに比して、バークの思想世界の全体像把握の立ち遅れという悪しき結果を引き起こしてきたのではないか、と。かくして、『バーク読本』は、副題にも明示されるように、〈保守主義の父〉というステレオタイプなバーク像の「再考」——それは「抜本的修正」、さらには「解体」すらも含意する——を最優先課題として設定し、

9) 半澤(1978)は以下のような先駆者の指摘を残している。「保守主義という概念について多少なりとも理論的反省がなされるようになったのは、20世紀に入ってからのことであった。その先駆者はイギリスの保守党政治家H・セシルの古典的名著『保守主義』(1912)である。セシルはの中で、いつの時代にも人間の心の中にある未知なるものへの不安と不信、日常的に慣れ親しんだものへの固着傾向を自然的保守主義と呼び、それを、政策を持つことができる意識的な政治上の教義としての政治的保守主義と区別した。セシルの議論は、全体としては20世紀の政党としての保守党の理論的再武装のためのものであって、彼は、保守主義の具体的教義の創始者であり、たえずそこへ立ち帰るべき原点としてのバークの重要性をとくに強調している」(21)。

それに代わりうる新しい等身大のバーク像を以下のように示した。

バークは、「文明化」の推進力である習俗の洗練が古来の国制——その基盤に「財産の原理」あるいは「相続／世襲の原理」がある——の継承によって達成されてきたことを、歴史叙述にもとづきながら哲学的にも明らかにしようとした。時の効力によって形成されてきた習俗や国制などの「制度」の適切な機能を通じて、商業は発展し、人類は利己的情念の抑制を学び他者への共感能力を高め、国家＝文明社会は一定の政治的・経済的不平等を容認しつつ経済的にも道徳的にも繁栄する（それは翻って、被征服者側の「制度」の尊重なしでは望ましい征服が不可能であることを意味する）。これが本書の理解するところのバークにおける文明社会の基本原理である。それが実証的・経験的性格と規範的・批判的側面を併せ持つことができた（前者が現状追認的な態度を帰結しなかった）のは、哲学（理論）と行動（実践）との厳しい緊張関係の産物であったことに加えて、バークのアイリッシュ・バックグラウンドに負うところも大きかったのではないかと、本書は考えている。したがって、〈保守主義の父〉に代わりうる新しい等身大のバーク像として、目下、最も適切だと思われるのは、生涯を通して「人類の文明化」を希求しそれを理論的・実践的に問い続けた、〈18世紀ブリテンが生んだ偉大な啓蒙思想家・社会学者〉としてのバークである（中澤 2017c, 12-13）。

中澤（2009）は、（再）定義された保守主義を「啓蒙の一ヴァリエーション」（7, 244, 248）として解釈することによって、バークをヒュームやスミスと並ぶ18世紀イギリスの代表的啓蒙思想家の一人として描き出そうとしていたが、それはあくまで〈保守主義の父〉としての通説的なバーク像を維持しながらであった。別の言い方をすれば、バークとマルサスの思想をできるだけ多面的に掘り起こした後、それらをできるだけ広範に包摂しようような方向で保守主義を（再）定義する、という戦略を採用したわけである。しかし、バークがイギリス保守主義の一番打者でなくなってしまうと、その必然的な帰結として、マルサスもその二番打者としての資格を喪失する。バークとマルサスをともに「イギリス保守主義」の代表的思想家と見なして、両者の比較思想史研究から保守主義の（再）定義、保守主義概念の豊饒化へと進もうとする筆者の長期的な研究計画は、ここにいたって頓挫を余儀なくされた。先に筆者が「『バーク読本』は中澤（2009）の達成を根底から転覆させてしまうような「自己破壊」の書としての一面も有している」と書いたのは、この意味においてである。『バーク読本』の序章を脱稿したとき、筆者は「イギリス保守主義の〔一番打者バークに対する〕二番打者マルサス」という水田のスキームからの完全な離反を宣言したことになる。

このような「自己破壊」の危険をおかすことを決断するまでには相当な時間を要した。2015年12月¹⁰⁾と2016年1月¹¹⁾に中澤(2016)の下報告を行った際、筆者はまだこの決断にいたっていない。『パーク読本』の編集作業を開始した2016年10月から序章を脱稿する2017年3月までの半年の間に、筆者の思考に一大転換が生じた。その一大転換の最も強力なトリガーとなったのは、共同研究のメンバーである犬塚が提示した次の見解¹²⁾である。

パークの受容史・解釈史が一端を明らかにしたように、保守主義の理解をめぐるのは、さまざまな対立や論争が存在してきた。保守主義の本質はなにか。保守すべきはなにか。それは、体系化された教義をもつのか、精神や態度の次元のものか。どのような経済政策を採るか。だれに始まり、だれを含む思想的伝統か。2010年代の今でも、保守政権の変質が意識されるなかで、「正しい」保守主義のあり方を論じる書籍が相次いで刊行されている。／ところが、保守主義の理解をめぐる論争に決着をつける特権的な基準や方法は存在しない。そのような基準や方法についてのメタ・コンセンサスを想定することも難しい。その意味で、「本当の」「正しい」保守主義をめぐる論争は、共通のルールがなく、自分でルールを決められるゲームで勝ち負けを競うのに似て、いささか不毛である。・・・パークを基準や起源とすることに論理的・歴史的必然性はないし、パークを基準にしたにせよ、その解釈を一義的に確定することは難しい(犬塚2017, 35)。

筆者は中澤(2009)のあとがきで「本書は、第一義的には、「イギリス保守主義の成立」を主題とする歴史研究として読まれることを意図している」(247)と書きながら、同時に「本当の」「正しい」保守主義のあり方を論じようとしていた。「過去の遺産」の重視というフィルターをなるべく通さない保守主義理解の可能性、その独自の価値を主張しようとしていたし、そのように主張することによって保守主義が偏狭なナショナリズムや極右へと墮落してしまうことを防ぎうるのだ、と考えていた。これこそが当時の筆者にとっての歴史研究を通じた現代的諸課題への応答にほかならなかった。しかし今や、パークやマルサスの思想を歴史的に研究することと保守主義の現代的再定義を試みることとの間に巨大な懸隔が横たわっていることを、筆者は自覚するにいたった¹³⁾。

10) 経済学史学会関西部会第168回例会(於大阪経済大学)。

11) 第3回パーク研究会(於成城大学)。

12) それは2016年9月の第5回パーク研究会(於広島大学)で披露された。

13) もっとも、筆者自身は、中澤(2017c, 16, 注10)にも書いたように、「保守主義とは何か」を問うことそれ自体が無価値だと考えているわけではない。それは歴史研究とは別個の哲学的営みとして独自の価値を有するはずのものである。

III

イギリス保守主義の成立過程をバークとマルサスにおける政治経済学的思考の展開から追跡しようとする中澤（2009）は、「イギリス保守主義の〔一番打者バークに対する〕二番打者マルサス」という（水田のスキームに含まれる）規定を議論の前提的枠組みとしながら、一方で、わが国の経済思想史研究が長らく反動・反革命・反啓蒙・反進歩といったネガティブなニュアンスを強く含んだ「保守」概念¹⁴⁾によってマルサスの思想を特徴づけようと（レッテル化）してきた——マルサスと保守主義の結びつきにポジティブな価値を見いだそうとしない——ことに批判的でありつつも、他方で、それ以上に、マルサスと保守主義の結びつきそれ自体になかなか関心を示そうとしない海外の保守主義研究者の視野の偏狭さのほうにいつそう批判的であった¹⁵⁾。そこで、急進的な改革には反対しても漸進的な改革であれば歓迎するように保守主義概念をリベラルな方向に（再）定義できれば、マルサスの思想を漸進的改良主義としてポジティブに特徴づけようとする近年の海外の経済思想史研究¹⁶⁾を水田のスキームの枠内に何とか収容でき、それによって内外の研究を止揚することができるはずだ、という展望を持つにいたった。しかし、これを海の向こう側から見れば、当時の筆者は国際的に見てまったく一般的でない特殊日本的な舞台設定の上でマルサスを論じようとしていたことになる。その結果、筆者が長年にわたって彫琢に努めてきた漸進的改革論者としてのマルサス像は、海外の研究者にとっては新鮮味の薄い凡庸な解釈でしかなかった¹⁷⁾。同時に、筆者のそのようなマルサス思想へのアプローチに少なくない国内の研究者が「保守概念の不

14) わが国における「保守」と「反動」のカテゴリーとしての癒着傾向については、丸山（[1957] 1996, 85-86）を参照されたい。

15) 「保守主義研究者のマルサスへの関心は極めて希薄である。例えば、保守思想の古典的研究書であるラッセル・カークの『保守主義的精神』（1953）において、マルサスの名前は保守思想とは無関係な文脈で一度登場するだけである。1997年に公刊された保守思想のアンソロジー〔= Muller ed. 1997〕には、のべ25人もの思想家の著作からの抜粋が収められているけれども、そこにマルサスの名前は見当たらない。こうした事実が象徴するように、保守主義思想上のマルサスの位置はいまだに明確でない」（中澤 2009, 4）。「マルサスと保守主義」というトピックがこれまできわめて不十分にしか論じてこられなかった研究状況については、中澤（2015b, 88-90）で簡単なサーヴェイがなされている。

16) こんにちにおけるマルサス研究の第一人者の言葉を紹介しておきたい。「政府の専制と民間の急進主義との間の調停役を務めたがり、かつ漸次的改良の達成可能な期間を置こうとする、そのような穏健的改革者の役割という解釈こそ、マルサス一生涯の政治姿勢を明確にしてくれる」（Winch 1987, 50 / 訳 79）。マルサスの思想や論法の保守（反動）的性格をバークとの比較において浮き彫りにしようとする Himmelfarb（1983）、Hirschman（1991）、McNally（2000）などは、近年の海外の研究としてはむしろ少数派に属する。

17) 筆者は海外の専門学術誌に拙論（マルサス論）を投稿した際に返送されてきたレフェリー・コメントの内容からそのことを強く実感させられた。

当な拡張」として疑念を示した¹⁸⁾。「マルサスは保守?」と「マルサスは保守!」という二つの対照的な解釈の間で筆者は逡巡を余儀なくされた。しかし、こうした逡巡の根本原因がマルサスと保守主義の結びつきへの筆者の過度なこだわりにあったことは、もはや説明するまでもあるまい。

『バーク読本』によって〈保守主義の父〉としてのバークが歴史的な考証に耐えられない虚像であることが明らかにされた以上、「二番打者」としてのマルサスも同様に——むしろバーク以上に——虚像である、と断言せねばならない。筆者としては、水田のスキームからの完全な離反を宣言した今や、『フランス革命の省察』と『人口論』がともにフランス革命を批判した保守的な内容の著作であるという共通項に拘泥せず、バークとマルサスの差異に目を向けるほうが経済思想史研究として生産的な議論につながっていくはずだと展望している。一言で差異と言っても、実際には数多くの論点を設定することが可能であるが、筆者が以前から強い関心を寄せているのは両者の関与していた人的コネクション(あるいはネットワーク)の顕著な差異である。両者の思想がともに単なる保守反動ではなく、一定の改革主義的要素を含むものである以上、両者が既存の秩序の負の側面に対する批判的視座を有していたことは間違いないが、そのような批判的視座を醸成したコンテクストとして急進主義的な思想的傾向を帯びた人的コネクションに目を向けてみたいわけである。

ここではマルサスについてのみ触れることにする¹⁹⁾。筆者は若きマルサスの政治的見解が(ピット与党と敵対する)ウィッグ党フォックス派への強い共感のもとで形成されたことをすでに明らかにしているが(中澤 2009, 第6章; Nakazawa 2012)、それと同時にここで強く主張したいのは、若きマルサスが当時の著名な急進派知識人たちのネットワークの中に存在していたという事実の重要性である。

マルサスが通った非国教徒学院ウォリントン・アカデミーの指導教員ウェイクフィールド(Gilbert Wakefield, 1756-1801)もケンブリッジ大学ジーザス・カレッジの指導教員フレン

18) 学位論文の審査報告書においても、以下のような疑念が示された。「著者の〔保守主義の〕定義が普遍化できるかどうかは疑問である。・・・反動でも急進でもない保守主義は自由主義とどこが違うのか。・・・保守主義の選ぶべき価値は何か。結局は古来の国制であり、伝統・慣習、階層制社会であり、発展よりは秩序であり、支配と従属なのではないだろうか。保守主義原理とは何か。はたして自由主義や共和主義のような原理があるのか、疑問が残る」(田中・八木・竹澤 2009)。なお、このときに審査員より今後の課題として示されたいくつかの論点のうち、アイルランド問題については『バーク読本』の第5章と補論によって、東インド統治問題については同書第3章と第11章によって、かなりの量の議論を補足できたと考えている(筆者自身はそれらの諸章を直接執筆したわけではないが、その内容については編者としての責任を負っている)。

19) 『バーク読本』は政界進出以前の初期の諸作品をバーク思想の全体像把握にとって不可欠なものとして重視し、それらを正しく読み解くために、それらが書かれた史的文脈としてのアイリッシュ・コネクションを第5章できわめて深く掘り下げている。

ド (William Frend, 1757-1841) もユニテリアンであった。また、彼のデビュー作『人口論』およびデビュー第二作『食料高価論』の出版者ジョンソン (Joseph Johnson, 1738-1809) もユニテリアンで、T・ペイン、W・ゴドウィン、J・プリーストリー、M・ウルストンクラフトのような急進派知識人のパトロンであった (Tyson 1979, 146, 193-194; 安藤 2003, 50) ²⁰⁾。このような歴史的コンテキストのなかに『人口論』を置いてみると、出版者ジョンソンは『人口論』が穏健な改革派——小ピット政権下での市民的自由の縮小傾向を批判する、広い意味での急進派陣営——の書物であると見なしたからこそ出版を引き受けたのではないか、との推測が成り立ちうる ²¹⁾。『人口論』がフランス革命に批判的な内容を含んでいたことは確かだが、それをメルクマールとして『人口論』を同時代人にとっても保守的な内容の著作だったと解釈するのは拙速ではないか ²²⁾。

『人口論』が保守的な内容の著作だという今日 (特にわが国で) 通説化している解釈にわれわれが慣れ親しみすぎており、それがもたらす安心感への過度な依存が色眼鏡のごとく作用して、マルサス思想の全体像把握に対する認識上の障壁・歪み・バイアスを形成してしまっているのではないか。そのような危険性について、われわれはもう少し自覚的であるべきで

20) ジョンソンはプリーストリーの書物を 50 冊以上も出版した。また、バーク『フランス革命の省察』に対する反駁の書であるウルストンクラフト『人間の権利の擁護』やペイン『人間の権利』第一部 (初版のみ) も、マルサスが『人口論』で直接の批判の対象としたコンドルセの『人間精神進歩史』 (英訳) も、ジョンソンが出版した (Mayhew 2014, 73; 安藤 2003, 13-14, 18)。

21) Wikipedia (英語版) では Joseph Johnson について、“Johnson is best known for publishing the works of radical thinkers such as Mary Wollstonecraft, William Godwin, Thomas Malthus, and Joel Barlow, feminist economist Priscilla Wakefield, as well as religious dissenters such as Joseph Priestley, Anna Laetitia Barbauld, Gilbert Wakefield, and George Walker.”とあり、マルサスはウルストンクラフトやゴドウィンと同列に急進的思想家であると見なされている。この叙述はわが国と海外のマルサス観のコントラストを象徴しているかのようで、非常に興味深い。筆者は、管見のかぎり、マルサスを急進派の陣営に帰属させる邦語文献を知らない。なお、ここで筆者は、「若きマルサスが当時の著名な急進派知識人たちのネットワークの中に存在していた」という事実から、彼の急進思想への共感をただちにまっすぐ引き出せるとまでは考えてない。この点についてはプレンの以下の見解が参考になる。「マルサスは自分の先生〔ウェイクフィールド〕固有の哲学は排除して、先生の独立の精神を吸収したようである。ウェイクフィールド先生も、教師が学生に独立的思考を奨励すれば、学生の何人かは教師の教えを拒否するようになることを承知していたに違いない」(プレン 1994, 7)。

22) 『人口論』が保守的な内容の著作であると解釈されやすかったのは、それがフランス革命批判を含んでいたからだけではない。労働者の貧困の原因が資本主義的生産ではなく労働者の側 (絶対的過剰人口) にあるとした『人口論』の論法がマルクスを激怒させ、マルクスのマルサス批判がとりわけわが国の学界において長らく大きな影響力を持った——水田のスキームもこの影響下にある——ことも、別の原因として指摘できる。さらに、『人口論』初版の序文が伝えるところによれば、マルサスは当時の急進的思潮に同情的だった父ダニエルとゴドウィンの論文「貪欲と浪費」(『探究者』所収) について議論し、父を論駁しようとして研究を重ねるなかで『人口論』を書き上げるにいたったが、この有名なエピソードから急進派の父親に対する保守派の息子という図式がクローズアップされやすかったことも、さらに別の原因として指摘できよう。

はないか。

参考文献

- Cecil, Hugh. 1912. *Conservatism*. London: Home University Library. 柴田卓弘訳『保守主義とは何か』早稲田大学出版部, 1979年.
- Himmelfarb, Gertrude. 1983. *The Idea of Poverty: England in the Early Industrial Age*. New York: Alfred A. Knopf.
- Hirschman, Albert O. 1991. *The Rhetoric of Reaction: Perversity, Futility, Jeopardy*. Cambridge, MA and London, England: The Belknap Press of Harvard University Press. 岩崎美穂訳『反動のレトリック—逆転, 無益, 危険性』法政大学出版局, 1997年.
- Mayhew, Robert J. 2014. *Malthus: The Life and Legacies of an Untimely Prophet*. Cambridge, MA and London, England: The Belknap Press of Harvard University Press.
- McNally, David. 2000. Political Economy to the Fore: Burke, Malthus and the Whig Response to Popular Radicalism in the Age of the French Revolution. *History of Political Thought* 21 (3) : 427-448.
- Muller, Jerry Z. ed. 1997. *Conservatism: An Anthology of Social and Political Thought from David Hume to the Present*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Nakazawa, Nobuhiko. 2012. Malthus's Political Views in 1798: A 'Foxite' Whig? *History of Economics Review* 56: 14-28.
- Tyson, Gerald P. 1979. *Joseph Johnson: A Liberal Publisher*. Iowa City: University of Iowa Press.
- Winch, Donald. 1987. *Malthus-Past Masters*. Oxford: Oxford University Press. 久保芳和・橋本比登志訳『マルサス』日本経済評論社, 1992年.
- 安藤潔. 2003. 『イギリス・ロマン派とフランス革命—ブレイク, ワーズワース, コールリッジと1790年代の革命論争』桐原書店.
- 犬塚元. 2017. 「受容史・解釈史のなかのバーク」中澤・桑島編(2017)所収, 20-41.
- 宇野重規. 2016. 『保守主義とは何か—反フランス革命から現代日本まで』中公新書.
- 大河内一男. 1950. 『経済思想史 第一巻』勁草書房.
- 佐藤光・中澤信彦編. 2015. 『保守的自由主義の可能性—知性史からのアプローチ』ナカニシヤ出版.
- 田中秀夫・八木紀一郎・竹澤祐文. 2009. 「博士学位請求論文審査報告書: 中澤信彦『イギリス保守主義の政治経済学—バークとマルサス』」京都大学大学院経済学研究科.
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/126484/1/yeir00349.pdf>
- 中澤信彦. 2009. 『イギリス保守主義の政治経済学—バークとマルサス』ミネルヴァ書房.
- 中澤信彦. 2010. 「『保守』主義者としてのマルサス」『マルサス学会年報』19: 1-28.
- 中澤信彦. 2015a. 「エドマンド・バーク—「義務」なき「選択の自由」の帰結」佐藤・中澤編(2015)所収, 29-60.
- 中澤信彦. 2015b. 「T・R・マルサス—農工バランス重視の経済発展論の今日的意義」佐藤・中澤編(2015)所収, 87-117.
- 中澤信彦. 2016. 「『バークとマルサス』はどのように論じられてきたのか?—研究史から見えてくるもの」『関西大学経済論集』65 (4): 35-59.
- 中澤信彦. 2017a. 「18世紀中葉~19世紀初頭のイングランド社会の結婚パターンとその思想的意義—ハードウィック結婚法をめぐるバークとマルサスの見解を手がかりにして」『経済論叢』191 (1): 1-18.
- 中澤信彦. 2017b. 「『バークとマルサス』研究と小林昇経済学史研究」『マルサス学会年報』26: 95-117.
- 中澤信彦. 2017c. 「〈保守主義の父〉再考のために—まえがきに代えて」中澤・桑島編(2017)所収, 1-18.
- 中澤信彦・桑島秀樹編. 2017. 『バーク読本—〈保守主義の父〉再考のために』昭和堂.
- 半澤孝磨. 1978. 「政治思想としての保守主義」『近代政治思想史(3) 保守と伝統の政治思想』所収, 半澤孝磨・三辺博之・竹原良文・安世舟著, 有斐閣新書, 1-35.

- ブレン, ジョン. 1994.『マルサスを語る』溝川喜一・橋本比登志編訳, ミネルヴァ書房.
- 丸山眞男. [1957] 1996.「反動の概念—ひとつの思想史的接近」『丸山眞男集第7巻』所収, 岩波書店, 77-110.
- 水田洋. 1969.「イギリス保守主義の意義」水田洋編『世界の名著 第34巻 バーク マルサス』所収, 中央公論社, 5-48.